



## 沖縄県におけるオクラ立枯性病害の病原菌とその発生実態

沖縄県農業研究センター おおしろ 大城 あつし 篤\*  
 沖縄県農業研究センター石垣支所 あしとみ 安次富 あつし 厚  
 法政大学生命科学部 ひろおか 廣岡 ゆう 裕 り 吏

### はじめに

沖縄県のオクラ (*Abelmoschus esculentus*: アオイ科トロアオイ属) 生産は全国で3位の出荷量があり、生産量は2008年以降、約1,200~1,700トンで推移していることから(沖縄県農林水産部, 2018)、本県の戦略品目として重要な位置づけにある(図-1)。本県のオクラの作型は、春植露地栽培と、これを切戻して年内まで収穫する切戻し栽培が主流であるが、ビニール栽培やトンネルを利用してさらなる早出しを行う早熟栽培や、遅出しを目的とした秋植栽培(主に八重山地域)も行われている(図-2)(沖縄県農林水産部, 2014)。本県のオクラの出荷は4~12月までの期間が中心であり、高温期の7~9月、特に8月は出荷量が多く、低価格で推移することが多い。他県での生産量が少なくなる4~6月と10~12月にいかに多く出荷できるかが所得増大のポイントとなる。近年、本県の主力の作型である春植露地栽培と早熟栽培において、オクラの立枯性病害の発生が多く、問題

となっており、その要因解明が求められた。本県のオクラの立枯性病害の要因解明については、外間(1983)により幼苗期に発生する立枯性病害の病原として *Pythium* sp. と *Rhizoctonia* sp. が関与し、さらに切戻し後の立枯性病害の病原として *Phytophthora* sp. が関与することが明らかにされた(外間, 1990)が、それ以降、本県のオクラの立枯性病害の詳細な調査はなされていない。そこで、本報では、近年の本県におけるオクラ立枯性病害の病原菌の特定ならびに県内での発生状況について調査したので、その結果を報告する。

### 被害および特徴

2015~16年にかけて、沖縄県のオクラの主要産地における立枯性病害の発生実態調査を実施した。調査の結果、立枯性病害の病徴のタイプは4種類(病徴A, B, C, D)に分類され、病原として5種の病原菌の関与が明らかとなった(図-3)。

病徴Aは苗の根から上位へ黒色もしくは褐色に腐敗

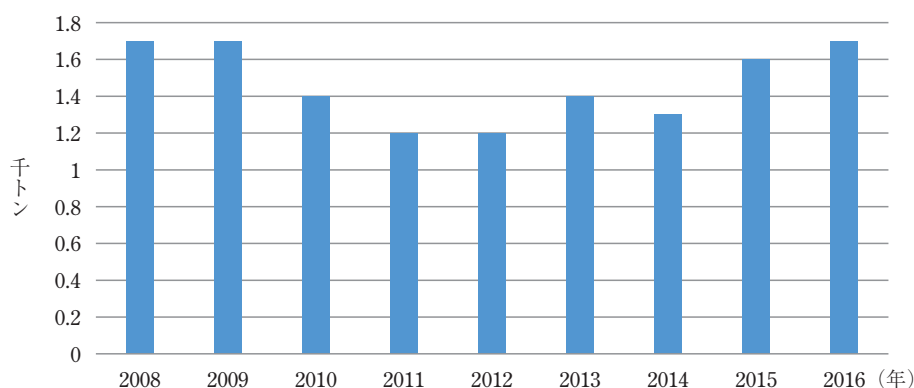


図-1 沖縄県のオクラの生産量の推移

The Pathogens of Wilt Diseases of Okra and It's Occurrence in Okinawa Prefecture. By Atsushi OOSHIRO, Atsushi AJITOMI and Yuuri HIROOKA

(キーワード: オクラ, 立枯性病害, 発生実態)

\*現所属: 沖縄県八重山農林水産振興センター